とらけい

広報 てんのう

No. 115

昭和48年 3月31日発行

発行・秋田県天王町役場　TEL（天王）1. 42. 135
編集・企画室　印刷・一日市印刷　TEL（018875）2038

統計から見た天王町

農業、工業、商業の三統計

各種の統計数字から、天王町の農業、工業、商業の大まかな推移を示したが、農業の縮少、工業の生産出荷の大幅ダウンおよび、商業の伸び悩み……等、見られた。

農業

半数近くが一ha未満

わずかに増えた専業農家

農家数および専兼業別農家数

昭和四十七年二月一日現在における天王町の総農家戸数は、千三百九十三戸で過去十年間の最低となった。

昭和三十九年の千四百三十三戸を最高に、昭和四十五年まで不安定に増減を続けてきたが、多量の余剰米のため減反施策をした昭和四十五年、四十六年および、三年目を迎えた昭和四十七年と漸減の一途をたどっている。

また、専兼業別農家数を見ると、昭和四十七年調査で兼業農家は全農家の九十四％に当たる千三百七戸となり、農外収入に頼らない専業農家は六％、八十六戸となっている。

専業農家だけを見ると、前年に比べ戸数ではわずかに増えたがこのような総兼業化の傾向の中で、主に農業収入に依存する第一種兼業農家が六百十一戸で約四十四％、農業以外の兼業収入に多くを依存する第二種兼業農家が六百九十六戸で、今回初めて総農家の約半数の五十％になったことが注目される。

農家率（全世帯に対する農家の割合）も、昭和三十八年の五十七・三％から昭和四十三年の五十・四％と低下、さらに昭和四十七年調査では四十一・一％となり、この十年間に十六・二％が数字の上で非農家となった。

ちなみに、この天王町の農家率は、秋田県全体の農家率三十八・七％より高く、南秋田郡内全体の五十三・二％より大幅に低くなっている。

◇

経営耕地規模別面積

経営耕地規模別農家数分布を見ると、昭和四十七年調査で〇・五ヘクタール未満農家が二十一・五％、〇・五～一・〇ヘクタールまでの農家が二十六％で一ヘクタール未満の零細規模農家が全農家の四十七・五％六百六十二戸と約半数に近く、一・〇～一・五ヘクタール未満農家が二十一・六％で三百一戸、一・五～二・〇ヘクタール未満農家が十四・二％で百九十七戸、二・〇～三・〇ヘクタール未満農家が十二・七％で百七十六戸となり、三ヘクタール以上の農家が四％で五十七戸の構成となっている。

これを過去十年間と比較すると各分布とも構成比は、ほとんど動きが見られず、しいてあげるなら、三ヘクタール以上の大型農家が増加している。

専兼別農家数および農家率

年	総農家数	専業農家	第1種兼業	第2種兼業	総世帯数	農家率
38	1,401戸	147戸	599戸	655戸	2,444戸	57.3%
39	1,433	160	581	692	2,570	55.7
40	1,409	184	622	603	2,496	56.4
41	1,412	181	721	510	2,721	51.9
42	1,419	173	576	670	2,741	51.8
43	1,423	261	662	500	2,824	50.4
44	1,414	203	694	517	2,881	49.1
45	1,420	128	685	607	2,845	49.9
46	1,400	79	642	679	3,435	40.7
47	1,393	86	611	696	3,382	41.2

経営耕地規模別農家数　（戸）

規模別 ha / 年次	0.5 未満	0.5～0.9	1.0～1.4	1.5～1.9	2.0～2.4	2.5～2.9	3.0 以上	総農家戸数
昭和41年	328	379	299	187	113	66	40	1,412
昭和45年	295	376	308	197	126	64	54	1,420
昭和46年	286	377	309	183	117	77	51	1,400
昭和47年	300	362	301	197	113	63	57	1,393

【農家人口】

農家一戸当たりは五人

農家人口を見ると過去七年間減少を続け、昭和四十七年調査では前年より九十二人（一・三％）減少して七千七十四人となった。

このままの減少率で進むなら今回調査では七千人を割ることが必至となる。

農家一戸当たりの人員は、昭和四十七年調査で五・〇人、前年に比べ〇・一人減っている。

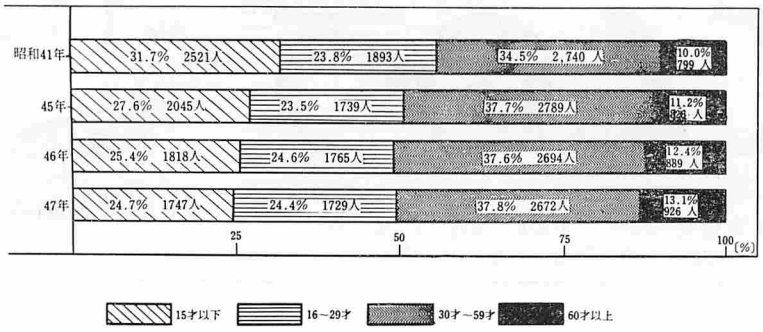
これは、全世帯一戸当たり人員三・九人（昭和四十七年三月末現在）より一・一人ほど多く、農家人口率（総人口に対する農家人口の割合）は五十二・三％で前年の五十四・〇％を一・七％下回った。

これは秋田県全体と比較すると、農家一戸当たり人員は五・〇人と同じで、県全世帯一戸当たり人員は四・一人で天王町は三・九人と低い。

次に年齢別で見ると、十六才～二十九才までの人口は前年と比べ〇・〇二％減の千七百二十九人、三十才～五十九才は〇・〇一％減の二千六百七十二人となり、この年齢層は年々減少傾向にあるが、六十才以上の高齢者人口は逆に〇・〇四％増と毎年増加している。

総数では〇・〇二％の減となっている。

農家人口年令別内訳



農業人口および一世帯当たり人員数の推移

項目 / 調査年	農家戸数	農業人口	うち男	農家人口率	農家一戸当たり人員	全世帯1戸当たり人員
昭和41年	1,412戸	7,954人	3,954人	60.6%	5.6人	4.8人
45年	1,420	7,399	3,660	57.6	5.2	4.5
46年	1,400	7,166	3,550	54.0	5.1	3.9
47年	1,393	7,074	3,498	52.3	5.0	4.0

経営耕地面積

天王町の総経営耕地面積は千七百七ヘクタールで、このうち田は千四百十一ヘクタールで全体の八十二・七％を占め、畑が二百三十二ヘクタールで十三・六％、樹園地が六十四ヘクタールで四・七％である。

これは前年と比べ総経営耕地面積は五ヘクタール減少したが農家一戸当たりの耕地面積は、農家戸数の減少に伴い、前年の一・二二ヘクタールから一・二三ヘクタールに増加した。

これは、秋田県全体の一農家当たりの耕地面積より〇・〇一ヘクタール多くなっている。

総経営耕地面積の推移

（ha）

項目別 / 調査年	総耕地面積	田	畑	樹園地	農家1戸当たり
昭和40年	1,619	1,195	340	85	1.15
45年	1,710	1,420	224	66	1.21
46年	1,712	1,419	227	66	1.22
47年	1,702	1,411	232	64	1.23

農用機械

農家が所有する農用機械のうち、とくに田植機、自脱型コンバイン、動力刈取機、米麦用乾燥機等の伸びが著しい。

田植機は昭和四十七年調査で十二台で前年の四倍、自脱型コンバインは四十五台で二・三倍、動力刈取機は二百四十台で一・七倍、米麦用乾燥機は五十一台で一・五台となっている。

また、耕うん機及び農用トラクターでは、十馬力以上の伸びが大きい。

農用機械の普及率は、耕うん機および農用トラクターが、十農家当たり五・一台（前年四・九台）、動力散粉機一・六台（同二・四台）、動力刈取機一・七台（同一・〇台）、動力噴霧機一・八台（同一・五台）、田植機〇・八台（同〇・二台）となっている。

◇

◇

◇

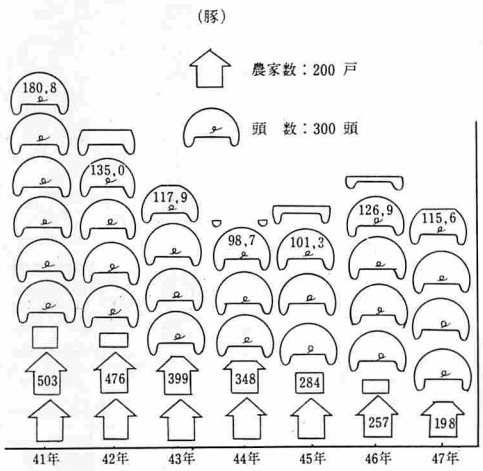
農用機械（個人所有）

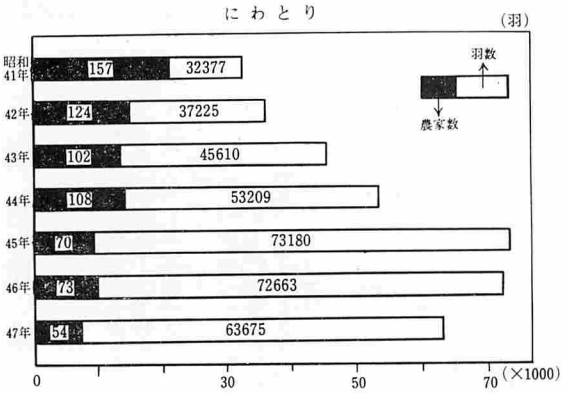
（台）

年次	耕うん機 農用トラクター	動力噴霧機	動力散粉機	田植機
昭和46年	682	210	333	3
昭和47年	708	244	361	12
前年対比（%）	103.8	116.2	108.4	400.0

年次	動力刈取機	自脱型コンバイン	米麦用乾燥機	動力脱こく機
昭和46年	141	19	34	523
昭和47年	240	45	51	510
前年対比（%）	170.2	236.8	150.0	97.5

家畜の飼養農家数および飼養頭羽数





家畜

豚を飼養する農家数は百九十八戸で頭数千百五十六頭、これは前年に比べ百十三頭〇・〇九％減少しているが飼養農家数の減少に伴って、一農家当たりの飼養頭数は前年より約一頭多い五・八頭となった。

一方、にわとりを飼養する農家数は五十四戸で羽数は六万三千六百七十五羽となり、前年の七万二千六百六十三羽に比べ約三％減少している。

しかし、これも昨年の農家一戸当たりの羽数は九百九十五羽で昭和四十七年となると千百七十九羽となり、多羽化飼養の傾向にある。

工業

伸びた出荷額

―十年間に二十二倍―

天王町の製造事業所数について見ると事業所の数は、ほとんど増減が見られず、この十年間横バイ状態が続いている。

昭和三十六年の製造事業所は三十二事業所で天王町全事業所三百八十六（昭和三十五年事業所統計）の八・三％に相当していたが、昭和四十六年になると全事業所四百八十八（同）の五・五％となり製造事業所の伸び悩みが見られる。

しかし、従業者数について見ると年々増える傾向にあり、昭和三十六年の一事業所当たり三・四人であったのが、昭和四十六年になると二十四・八人となり従業者六百七十人は、天王町総人口一万三千二百七十三人（昭和四十六年三月三十一日現在）の約五％にあたる。

しかし、これは数字だけで平均的に一事業所約二十五人とは判断できず、天王町の場合、従業者が一人～三人までの事業所が、全体の四十八％を占め、さらに一人～九人まで、つまり十人未満までの事業所が全体の約六十六％に達している。

次に製造品総出荷額について見ると、秋田県全体の総出荷額はこの十年間で約三倍の伸びを示しているが、天王町を見るとこの十年間に約二十二倍強の大幅な伸びを見せている。

この大幅な伸びは、電気機械器具製造業の伸びによるところが大きな要因である。

しかし、昭和四十六年度の天王町製造品総出荷額十五億二千四十九万円は秋田県全体出荷額二千六百六十三億一千九百五十三万円の〇・〇〇六％、六十四町村平均十六億七千八百九十三万円の九十・六％で天王町は郡部全体レベルより下回っていることがわかる。

そのため、秋田県全体に対する天王町の構成比も、昭和三十六年から大幅に伸びたものの、〇・〇〇五七％と依然低くなっている。

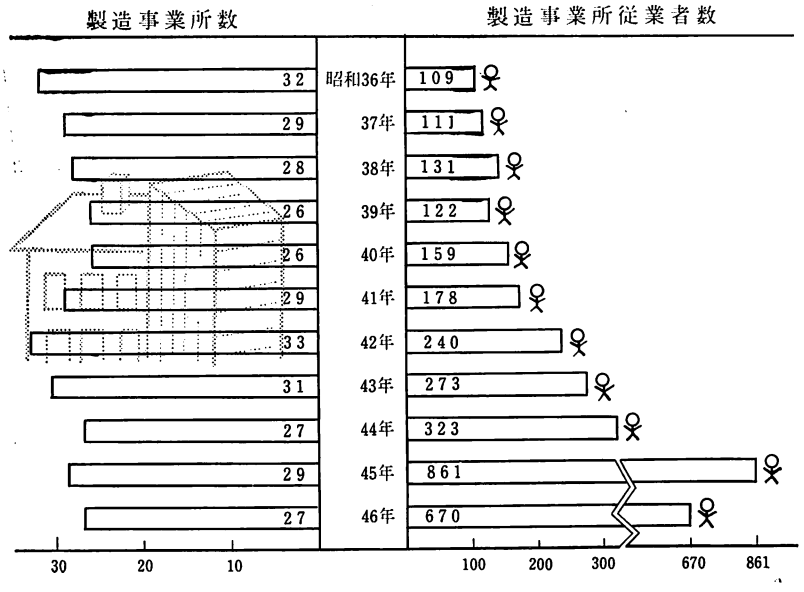
一事業所当たりの出荷額を見ると昭和三十六年の二百十万円から二十七倍強の五千八百三十一万円となっている。

昭和四十三年に一千万円を越えてから急激な伸びを見せている。

この減少の原因としては、前述したように電気機械器具製造業の出荷額が前回調査に比べ約四十九・七％減と約半数の出荷額にとどまっているのと、窯業土石製造業も約三十七・七％の減少を示している。

天王町製造事業所の中で、総出荷額が全体の七十七・八％を占めるこの二業種の落ち込みが大きく、逆に昭和四十五年比二倍弱の伸びを見せた、木材、木製品製造業が目立つが、全業種比率の十六・三％と低く、他の家具、装備品製造業や食料品製造業の伸びもわずかなために、総出荷額の大幅な減少を押えることができなかった。

最後に、今回昭和四十七年十二月三十一日調査の結果は、まだ集計されていないが、昭和四十五年の総出荷額を上回ると思われ二十五億を突破する見込みである。



事業所数は伸び悩み

昭和四十六年度工業統計調査結果から、天王町の工業生産活動状況を見ると、製造事業所は二十七事業所で、昭和四十五年調査時に比べ二事業所が減少しただけで、昭和四十四年調査時でも二十七事業所と前述のように、十年間通して見てもほとんど増減は見られない。

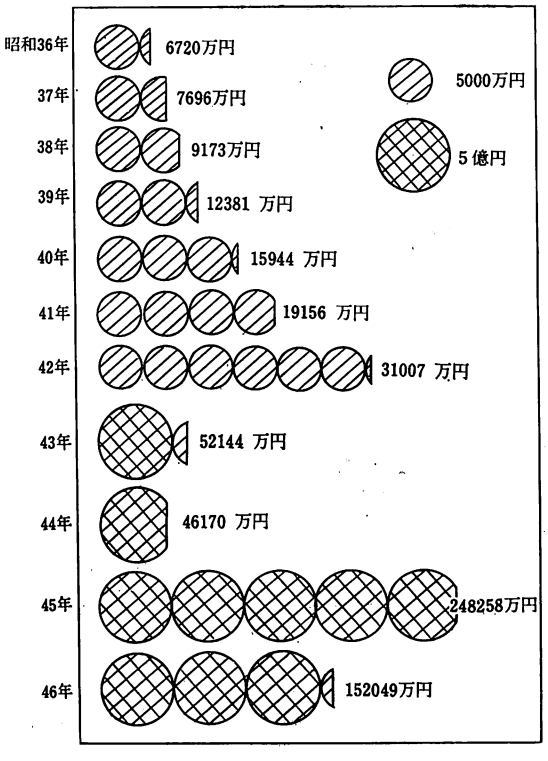
次に、従業者数について見ると、六百七十人で前年に比べ百九十一人約二十二％の減少を示している。

これは次の製造品総出荷額とも関連しているが、電気機械器具製造業の大幅な減少によるもので、この業種だけで昭和四十五年調査の六百七十八人が、四十六年になると四百六十六人で三十一・三％の減少である。

前年調査でこの業種だけで、全体従業者の七十八・七％を占めていたために、この大幅な減少となった。

次に製造品総出荷額についても同様に、昭和四十五年の二十四億八千二百五十八万円の出荷額に比べ昭和四十六年の十五億二千四十九万円となり三十八・八％の大幅な減少を示している。

製造品総出荷額



業種別事業所数および出荷額

商品中分類＼年度＼項目	昭和45年度 事業所数	従業者数	総出荷額	昭和46年度 事業所数	従業者数	総出荷額
		人	万円		人	万円
食料品	8	24	5,078	8	23	6,379
木材木製品	3	31	12,502	4	82	24,847
家具装備品	8	13	1,810	8	11	2,584
印刷出版業	1	X	X	—	—	—
窯業土石製品	4	105	29,254	4	88	18,510
電気機械器具	4	678	198,399	3	466	99,729
その他の製品	1	X	X	—	—	—
計	29	861	248,258	27	670	15,2049

全事業所の約半数を占める

天王町商業の推移

昭和四十七年五月一日現在の商業統計調査結果による天王町の商店総数（卸売業、小売業、飲食店の合計）は二百二十七店で、十年前調査（昭和三十七年）と比較すると三十七店（一十二・九％）増加した。

また、従業者数は四百七十人で、同じく十年間で百九十三人（四十一・一％）増加した。

商店数及び従業者数は、それぞれ調査時ごとに増減をくり返しており、商店数だけを見ると、二年後の調査時でも二百二十人～二百三十人前後にとどまる見込みである。

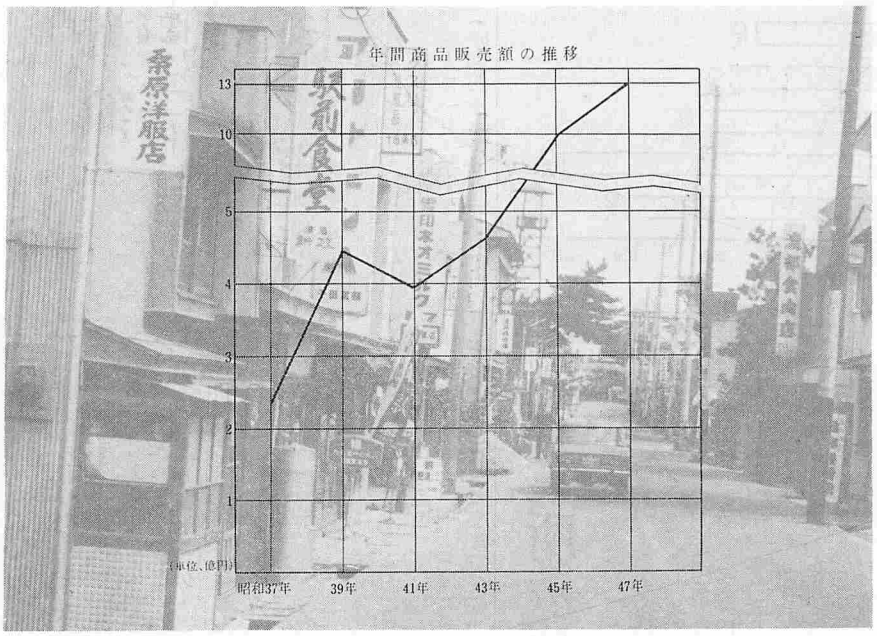
次に、年間商品販売額は昭和四十七年調査で十三億千四十六万円で、調査時毎三十％前後の伸びを示している。

昭和四十七年数値を昭和四十一年を基準とした指数でみると商店数は百四・一、従業者数百十二・四、年間商品販売額では三百三十一・四となり、先に示したような結果となっている。

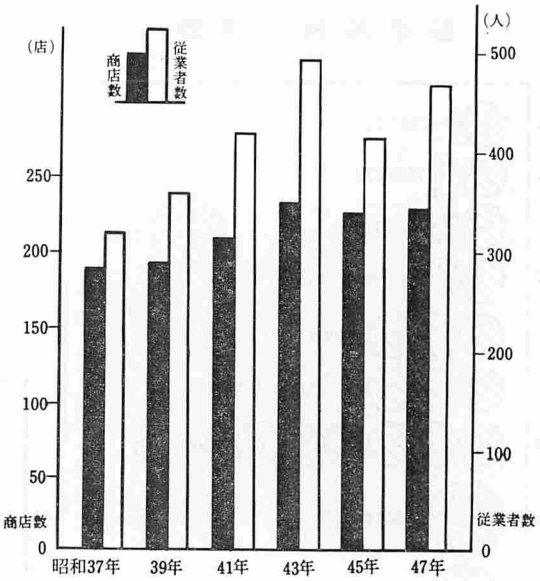
一方、今回調査結果から商店数の二百二十七店は、天王町全事業所四百八十八（昭和四十七年調査）の四十六・五％に当たり、従業者数の四百七十人は同じく二十二・八％に相当する。

天王町商店の状況

区分	昭和37年	昭和39年	昭和41年	昭和43年	昭和45年	昭和47年
商店数	店 186	190	218	234	225	227
従業者数	人 319	360	418	495	418	470
年間商品販売額	万円 23,269	44,496	39,544	46,039	105,452	131,046



商店数及び従業者数の推移



中でも飲食店の伸びが小売、卸売に比べてよくなっている。

一商店当たりの従業者数は、二・一人で前年の一・九人よりわずかに多くなり、県全体平均三・七人に一・六人少ない。

次に、年間商品販売額は、前年の十億五千四百五十二万円に比べ十九・六％増の十三億千四十六万円となり、昭和四十三年から昭和四十五年までの急激な伸びは見られなかったが、しかし着実な伸びを示し、一店当たりの年間販売額も初めて五百五十万円を突破した。

地域的に商店数の分散をみると、天王町を八ブロックに分けてみるならば、天王が二十七・三％（六十二店）で一番多く、次に二田地区の二十・三％（四十六店）、追分地区の十九・八％（四十四店）となり、この三ブロックだけで総商店数の約六十七％（百五十二店）を占めている。

小売業が主流

昭和四十七年調査の総商店数は二百二十七店で前年対比百・九％でほとんど増減はない。

総商店数の八十四・六％（百九十二店）を占める小売業は、前年対比百四・三％でわずかながら伸びているが、逆に、卸売業および飲食店はそれぞれ減少した。

増加した小売業の主な業種は食料品小売、およびその他の小売業で、この二業種は小売業百九十二店中約半数を占める。

一方卸売、飲食店の減少した業種を見ると、卸売業の生鮮魚介類と建築機材の二業種、飲食店では、料亭、割ぽう店の三店及び、すし屋、うどん、そば店の業種が減少している。

次に、従業者数を見ると、昭和四十七年調査四百七十人で前年対比十一・一％（六十二人）増加している。

業態別に増減をみると、従業者数は商店数とは逆に増えている。

○…

○…

商業の状況

区分	総数		
	商店数	従業者数	年間商品販売額
昭和47年	227店	470人	131,046万円
昭和45年	225	418	105,452
区分	卸売業		
	商店数	従業者数	年間商品販売額
昭和47年	7店	21人	16,650万円
昭和45年	8	16	17,300
区分	小売業		
	商店数	徒業者数	年間商品販売額
昭和47年	192店	369人	110,192万円
昭和45年	184	343	85,356
区分	飲食店		
	商店数	従業者数	年間商品販売額
昭和47年	28店	80人	4,204万円
昭和45年	33	59	2,896